

日吉台地下壕

（連合艦隊司令部ほか、旧海軍機関地下施設）

特定非営利活動法人 横浜の自然と歴史を守る会 寺田貞治

● 日吉台地下壕の分布と概要

地下壕のある場所について、東急東横線日吉駅東側の塵懸キャンバス内に三ヶ所、西側の塵懸普通部の南側（箕輪）に一ヶ所、ある。川崎市蟹ヶ谷の旧駅構造は、塵懸のキャンバス内だけに長さ約二三十㍍に及ぶ通信用機器のいた所にもある。日吉台地下壕の規格は、塵懸の普通部の南側は小さく、数百㍍にすぎない。西側の塵懸蟹ヶ谷は規模は少なく、當時は海軍の重要な施設が集中しており地下施設の中でも最大のものは、南側の丘の下にある地下壕（図の①）で、非常に複雑で、一見迷路のようになっている。この地下壕の西側の部分（図の①）は、最も堅牢で完備しており、連合艦隊司令部が入つてゐた。東側の部分（図の①・B）には、大本営海軍部の軍令部第三部（情報部）と、海軍省の航空本部が入つた。現在、新幹線がこの地下壕の上を走つている。

A の司令部地下壕内の作戦室・電信室・暗号室など重要なところには、当時移しかつた電光灯が使われ、昼のように明るかつたといわれるが、灯が在はれは眞暗である。高校校舎（第一校舎）付近現地地下壕は（図の②）は、最も小さく、当時、校舎内で仕事をしていた情報部の人たちの防空壕と前して掘られたものである。高校校舎の南側玄関門と並んで地下壕への出入口があつたが、既に埋された（図の③）は、その中心に広い地下室があり、そこから六本の地下壕が放射状に延びた構造をしている。この地下壕には海軍省の人事局が入つていた。（①）のコンクリートでできている。この（④）は、東西方向に真直ぐに二本の地下壕と、これらを結ぶまるでアミダラくじのようになる掘られた南北方向の地下壕で出来てゐる。ここには海軍省の監視本部が入る予定になつてゐた。北寄りの四隅はコンクリートや大谷石で造られている。連合艦隊司令部が远洋艦大淀から丘に上がつたのは、大淀では充分な司令部の機能を果たすこと